

描かれた家族、描かれなかった家族

——『武器よさらば』における反発と希求——

田 中 紀 子

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の『武器よさらば』 (*A Farewell to Arms*, 1929) は、主人公フレデリック・ヘンリー (Frederic Henry) が夜の雨の中、病院からホテルへ歩いて戻る場面で終わる。彼の恋人キャサリン (Catherine) は帝王切開のあと死亡、赤ん坊は死産、そしてフレデリックはたった一人とり残される。夫婦と子供という一つの家族が成立を果たせなかったという結末である。この作品は戦争と男女の恋愛が中心のテーマではあるが、家族とそれに関連した語が点在している物語でもある。作家ヘミングウェイの家族のこの作品への影響、特に彼が実人生において敵意を抱いていた母親のイメージを横柄な看護婦長に投影させ、また母親とは対照的な女性像をキャサリンとして作り上げた、という点はすでに多くの研究者が指摘している。そのため、本稿では作家との関連を離れ、この作品中に描かれた家族、そして極力描くことが避けられた家族を取り上げて整理することにする。

I イタリア兵と家族

戦場に赴いた兵士の大多数にとって、故郷は無事に帰ることを望む場所であり、家族は励ましと慰めを与える支えとなり、再会を願う愛情の対象となる。このことは『武器よさらば』に登場する第一次世界大戦中のイタリア人兵士たちにとっても同じで、故郷が話題に上ると、彼らの声には自ずと力が入る。例えば兵舎の食堂では、休暇を前にしたアメリカ人フレデリックに向かって、彼らはそれぞれ自分の村を訪れることを勧める。まず親友の軍医リナルディが「アマルフィへ行くべきだ。アマルフィの俺の家族に紹介状を書いてやるよ。息子みたいに大事にしてくれるぞ¹⁾」と言う。それに続いて「パレルモへ行った方がいい」、「カプリへ行くべきだ」と声が入る。同じ隊に所属する神父は、「アブルッツィを見てもらいたいものです。そしてカプラコッタの私の家族を訪ねてもらいたいです」と言い、さらに「すばらしい猟ができますよ。村の人たちも好きになるでしょう。寒いけれど晴れてからっとしています。私の家に泊まったらいいですよ」(9)

この「僕たち」がフレデリックと彼の兄弟を指すのか、近所の友達なのか明らかにされないし、村の名前も提示されない。この箇所において印象的なのは喪失感である。彼が完全に失ったと感じているのは形ある物としての納屋と林ばかりでなく、無垢な幼少時代と当時の幸福感もである。

さらに、フレデリックには家庭のぬくもりさえも取り戻せないものとなっている。恋人のキャサリンが相手であっても、家族についての話は短く打ち切られてしまう。自分には実父はもういず、継父がいるのだと打ち明けてすぐ、「君は会わなくてもいいんだよ」(154)と片付けてしまう。継父に対して心の距離を置くことは理解できるとしても、他の家族とは「あまりに喧嘩をしたものだから、次第に気にしなくなってしまったんだ」(304)と言う。家族に久しく手紙を出していないことについて「手紙を書くべきだとはわかっていたが、あまりに長い間放っておいたので今更書けそうになかった。書くことも全然なかった」(36)という箇所もある。彼の家族への連絡は極めて義務的で、文章が印刷された出来合いの軍製はがきの「無事です」以外は線で消して送るという始末である。作品中、アメリカの身内から届く郵便は祖父からのみであって、生活費に充てる小切手や新聞の切り抜きと共に、身内の様子や励ましの文章をつづった手紙を同封してくるこの祖父が、家族との唯一の懸け橋となっている。

スイスのホテルで出会うグレッフィ (Grefffi) 伯爵に同行している彼の姪を見て、フレデリックが「僕の祖母に少し似ていた」(258)という印象を持つ場面もあるのだが、作品中、彼が母親について語ることは一度としてない。迫撃砲弾で足に重傷を負った際にも他の兵士のように母親の名を呼ぶこともないし、入院中のある黄昏どきに「早い夕食のあと寝かしつけられた」(68)子供に戻ったような気がすることがあっても、母親との言葉のやりとりやお休みのキスにまで思いを巡らさない。実際に思い出していたとしても回想の言葉として表わしはしない。母親から彼宛ての便りが来ることもなく、生きているのか死んでいるのかさえ読者には知らされない。彼のセリフにある「喧嘩」がどのような内容であったのか我々には想像の域を出ないが、このように見事なまでに母親の存在がかき消されているとなると、フレデリックの母親への感情が冷えきっていると推測せざるをえない。

ヘミングウェイの最初の原稿には、母親に関連した一節を含む次のような箇所があった。

せいぜい我々が確信を持てるのは、我々が生まれて死ぬということ、また我々が愛する命あるものも死ぬということである。命あるものを数多く愛すれば愛するほど、多くが死ぬことになる。だから勝者のチケットを手に入れたかったら、永遠の生命の側につけばよいのであって、ほとんどの者が結局はそうするのだ。しかし生まれながらにして何も愛さず、母親の暖かい乳が一度として無常の喜びではなかったと

と特に熱心である。似たような言葉はカポレット一の退却の場面において、フレデリックと行動を共にする救急車の操縦兵たちからも発せられる。彼らはイモラの出身で、「実にいい所ですよ、中尉殿。戦争が終わったら来てください。ご案内しますよ。……素晴らしい町です。あれほどの所は見たこともないはずですよ」(208)と自慢げに語る。これらはすべて、イタリア兵の故郷と家族に対する誇りと暖かい想いを如実に示すセリフである。

戦争が続くと兵士たちの帰郷への願いは募ってゆく。塹壕の中では、見通しの無い戦闘に滅入りがちな救護車の運転手の一人が、いっそ敗戦になれば故郷へ帰れるのだ、と小声でつぶやく。だが、敗戦の際には敵の追撃により故郷も女たちもやられてしまうのだと聞き、「みんなに自分の家を守らせるんだ。女きょうだいは家の中に閉じこめるんだ」(50)と彼は声を荒げる。また退却の際には、「俺たちは家に帰るんだ。戦争はもう終わりだ」「そうだ、一人残らず家に帰るんだ」「みんな家へ帰るんだ」「平和万歳、さあ、家へ帰ろう！」(219)と兵士たちが口々に言いながらぬかるみの中を歩いてゆく。

彼らは一様に故郷の父母に敬愛の情を抱いており、親に対する嫌悪、反発、不満を述べる者はいない。たとえば神父は、自分の父親について「村人たちから敬意を払われており」(73)、よく知られた腕のよい猟師(9、73)であると繰り返し語る。また母親への愛情も確かなものであった(72)とふり返る。生死の境にある者が母親を呼ぶというのはあまりにもよく見聞きする状況であるが、果たしてこの作品においても、一人のイタリア人操縦兵が砲弾の攻撃により息を取り取る直前に「ああ、おっかさん、おっかさん！」(“Oh, mamma mia, mamma mia!” 55)とフレデリックのすぐそばで何度も叫ぶ。彼らにとって両親は確固たる心の拠り所なのである。

II フレデリックと家族

行動を共にするイタリア兵たちが家族と精神的にしっかりと結びついており、折りにふれて故郷の話をする中であって、主人公フレデリックの態度は奇妙に異なっている。彼は戦争が終わったら一刻も早く故郷へ帰りたいたとは言わないし、家族への愛情を吐露し懐かしがることはない。彼が少年の頃をしばし思い出す場面は一カ所だけあるのだが、その部分を引用してみよう。退却の途中、ある農家に入った時のことである。

干し草はいいにおいがして、納屋の干し草の中に寝ころんでいると、これまでの年月がすべて取り払われてしまった。僕たちは、干し草の中に寝ころがってお喋りをしたり、納屋の壁の上の方の三角の窓にとまったすずめを空気銃で射ったものだ。今ではその納屋はもうない。ある年梅の林が切られて、木々があつた所には切り株、ひからびた梢、枝、雑草だけになった。もう戻ることはできないのだ。(216)

したら、そして最初に愛したものが山の斜面であり、最後に愛したものが女であり、その女を取り上げられ、ただただその女を取り戻したいと望むのに彼女を失ってしまったとしたら、そうしたら不運であったということになって、初めから神を愛していた方が良かったということになるのかもしれない。だが私は神を愛してはいなかったし、こんなことを話したり考えたりしたって何にもならないのだ。²⁾ (傍点筆者)

フレデリックは、誕生した時から母親の暖かい愛情を与えられなかった、と思っているのである。この箇所を残しておく、早い段階でキャサリンの死を示してしまうことになり、その筋運びのまずさから結局そっくり削除されたのであるが、フレデリックの母親へのねじれた感情の根深さを作者ヘミングウェイが意識していたことが読み取れる箇所である。

フレデリックとキャサリンの会話の中でワインに話題が及ぶところがある。飲酒がもとで痛風を病んでいる父親をキャサリンは思い出すのだが、二人とも互いの父親には会う必要はない、と言う。そして母親についてはどちらも一言も発しない。きょうだいについても全く触れられず、このような家族への共通した態度が、二人の孤独感を増すことになり、二人を結びつける背後の要因となっているとさえ思われる。

しかしながら、家族というものは心の片隅に引っ掛かり続けるものである。フレデリックは脱走兵と間違えられ処刑直前に命からがら逃亡した時には、「アメリカにはどんなふうになるのだろう」(232)と家族への知らせの内容がふと気にかかる。また、出産を控えたキャサリンとスイスの山荘で過ごす場面には、次のような会話がある。

「あなたがスイスにいると知ったら、家族の人たちはあなたを引き戻そうとしないかしら？」

「多分ね。なんとか手紙で言ってやろう。」

「まだ手紙出してなかったの？」

「ああ。手形のことだけだ。」

「わたし、あなたの家族でなくてよかったわ。」

「電報を打つことにするよ。」

「家族の人たちのこと、ちっとも気にならないの？」

「前にはね、でもあまりに喧嘩をしたものだから、次第に気にしなくなってしまったんだ。」

「私、あなたの家族の人たちを好きになれそう。多分、とっても好きになるわ。」

「家族の話はよそう。でない心配し始めるから。」(304)

こうしたセリフから、フレデリックが家族に対しては徹底してかたくなな態度を装おうとしながらも、意識の外に全く追いやってしまうことができないでいることがわかる。

III 「家族」への希求

物語の最初、つまり1915年夏の終わりに、フレデリックはイタリア軍の一員としてイタリア北東部のある村に駐屯している。それ以前には「建築家になりたくて」(242) ローマで勉強していた、とある。ヨーロッパへ渡った一つの原因はアメリカの家族との折り合いの悪さと考えられる。自分なりの世界を組み立てるといふ建築家の仕事は、人生の再構築という彼の内なる願いを実現させるものと解釈できよう。

しかし戦争が始まると、自分はイタリア人でさえないのに軍に入隊する。母国アメリカが第一次大戦に参戦するのはそれよりまだ三年も先である。入隊の理由を数人から尋ねられるが、彼の答えは要領を得ない。初めて会った時のキャサリンからの質問には、「わかりません。すべての事にいつも説明ができるとはかぎりませんよ」(18) と言う。その翌日キャサリンの働く病院の婦長からの同じ質問に対しても「イタリアにいましたから。それにイタリア語を話せましたからね」(22)と答えるだけである。軍隊を捨てた後、ストレーザのホテルのバーテンダーから「どうして戦争に行ったのですか」と問われると「わからんな。馬鹿だったんだよ」(256) という具合で、最後まで彼の動機は明らかにされない。救護車で負傷者の運搬にあたるという任務を責任をもって果たしているはいるようだが、建築家への志を中断してまでの意義を戦争に見出して志願したのだろうか。周囲の若者たちが軍隊に入ったため自分もつられて同じ行動をとった、というような積極性に欠ける動機しか読者には伝わってこないのである。

異国にあり、家族との心のつながりもか細いフレデリックが戦争に身を投じたのは、むしろ自分にとっての「家」、所属し受け入れてもらえる場所が欲しかったため、と考えられないだろうか。³⁾ 食堂の場面では、彼は他の兵士たちと同等に冗談を交わし、軍隊という一つの「家族」の一員となっていることがわかる。駐屯所での任務から二日後宿舎へ戻ってきた時、彼は「家に帰った」(“I got home” 28) という言葉を使っている。仲間のうちでも特にリナルディとは「大の親友どおしだった」(12) と認める仲である。リナルディはフレデリックにキスをしたり抱き合ったり、と大げさな動作で親しみを表現するし、また絶えずと言ってよいほど「坊や」(“baby”) を連発し、「子犬君」(“little puppy” 27) と呼ぶこともあって、かなり年下の弟に対するような態度である。「君は俺の親友で、良き友で財政上の保護者なんだ」(12) とふざけ半分に言うこともあれば、入院中のフレデリックを訪ねて「俺たちは兄弟だ。愛し合っているんだ」(66)、「俺たちは戦争の兄弟だ」(68) と念を押すかのように言う。三ヵ月フレデリックが不在の間、リナルディは彼の歯磨き用のコップを見ては思い出し、再会すると「君は俺の一番の友で、戦争の兄弟だ」(171) という言葉を繰返して喜ぶ。こういう他者からの承認、愛情こそフレデリックが望んでいたものであろう。

「家族」の安らぎを求めるフレデリックだが、神父の家族が歓迎してくれるはずのアブルツィへは行かない。神父が何度も勧めたその村は「すばらしい猟ができ」(9)、村人は善良で、「寒いけれど晴れて空気は乾燥していて」、戦争で疲れた心身の浄化が約束されているような場所である。それなのにフレデリックはミラノ、ローマ、フィレンツェなどの都会へ赴き、酒と娼婦相手に自己嫌悪を繰り返すという休暇を過ごす。行きたいと思っていたのに「なぜ行かなかったのか自分にもわからなかった」(13)とあり、その理由は読者の推測に委ねられる。山間の村では農民たちから敬意を払われ「旦那」と挨拶される。夜、若い娘に誘惑的なフルートの音色を聞かせるのは禁じられている。外国人は証明書なしには狩猟はできない。そして「人が神を愛することは当然とされている。」(71) 要するに道徳、宗教、社会の秩序が攪乱されることのない所であり、うぶな若い神父が猥談の対象となったり、夜毎に娼家へくり出すといった軍隊での生活とは対極に位置するような所である。カーロス・ベーカー (Carlos Baker) は家庭＝山々、非家庭＝平原・軍隊と図式化した説明を行なっているが、⁴⁾ 軍隊はフレデリックにとってしばらくの間男兄弟のみで構成された家庭であったと解釈した方がよいであろう。互いの生き方を批判しない軍隊に受け入れられている居心地のよさを覚えている限り、清潔で静かな生活が営まれているアブルツィを一人で訪れることに躊躇を感じても不思議はない。現状への反省を余儀なくされる環境に耐えられるほどフレデリックはまだ強くはないのである。

しかし長引く戦争の中であって、フレデリックの心中に変化が生じる。休暇から軍隊へ帰ると、その「家」での自分の存在がかけがえのないものではないことに気づかされる。「僕がそこにいて監督をしようがしまいが明らかに何の変わりもなかった。……(仕事の順調な進み具合は) かなり僕自身にかかっていると思っていたが、僕がそこにいてもいなくても明らかにどうでもよかったのだ」(16)という印象を持つのである。その数日後、前線へ戻されたくなくて自らを傷つける別の部隊の兵士から「この馬鹿げた戦争をどう思いますか？」と尋ねられ、フレデリックは「最悪だよ」(“rotten” 35)と返答する。彼がこの戦争について否定的な感想を口に出すのはこれが最初である。さらにその晩には「この戦争は僕とは何の関係もないのだ」(37)と思い、夕食の席では「今夜は少々酒を飲まないで、みんなと兄弟のような気がしなかった」(38)とあり、軍隊から心が少しずつ離れてゆく様子がうかがえる。

キャサリンとの出会いはこの時点において起きる。戦場に赴いて少なくとも一年半は経っているが、フレデリックは相変わらず娼館での夜を重ねていた。そこでは「女たちが僕の体にまつわりついてくる。そして僕の兄弟の将校たちと二階の部屋へ上り下りする間に僕の軍帽を後ろ向きにかぶって愛情を示してみせる」(30)。このような繰り返しにくだらなさを覚えながらも、肉体的な満足を得る以上の関係をフレデリックは女性に

望んでいなかった。キャサリンへの最初の反応に見られるように、女性とは「チェスのゲーム」(26)、「ブリッジのようなゲーム」(30)という過程を経て短期間で首尾よくセックスに至るだけでよかったのである。精神的に真剣に関わりあい、理解しあう恋愛関係は、彼には面倒であり興味が持てなかったのだ。

だがこのすぐ後、同行していた操縦兵の一人が目前で死に、フレデリックも負傷して野戦病院へ送られる。目に入る光景はがらりと変わり、病室を昼間飛び回っている蠅は夜になると天井や電球にへばりつく。死者が運び出されてゆく。外では新しい墓が次々と作られ、十字架が用意される。訪れたリナルディは「君は心底からのイタリア人だ。火と煙だけで中身は空っぽだ。アメリカ人のふりをしているだけだ」(66)と言うが、神父は「あなたはイタリア人でさえありません。外国人なのです」(70)と言い、自分についての身近な二人の人間による解釈が全く異なることを知らされる。つまり死、そして自己のアイデンティティとの対峙を余儀なくさせられるのである。軍隊の仲間たちとの気晴らしはなく、孤独の中で新たな精神的な支えを求めようになるのは自然の流れであろう。フレデリックは神父から故郷や家族の話聞かされたり、さらに「あなたも愛するようになりますよ。きっとそうなりますよ。そうすれば幸せになります」(72)と言われる。このような状況で、自分にも意識されないうちに以前とは異なった形で女性を求める下地が出来たのであろう。そのため「誰とも恋なんか落ちたくなかった」(93)はずなのに、ミラノの病院に移されてキャサリンとの再会の瞬間に恋に落ち、「僕の中で何もかもがひっくりかえった」(91)のである。

心身共に傷を負った兵士が収容された病院を擬似的な家庭としてそこに安らぎを見出そうとすることは容易に想像できる。ヘミングウェイの真剣な初恋の相手となったのがアグネス・フォン・クロウスキー (Agnes von Kurowsky) というアメリカ人看護婦であったが、彼女も入院患者の兵士たちの気持ちを十分感じ取っていた。ヘミングウェイへの手紙に、「将校たちはここ(トレヴィゾの陸軍病院)をもっと明るいものにするために私たちにとどまって欲しがっているのです。家庭的な雰囲気⁵⁾を望んでいるのです」と書いている。無条件に自分を肯定し愛する母、姉、そして妻の役割まで引き受けてくれるキャサリンがいることで、病院はフレデリックにとって「家」となり、この病院については4回“home”(117、118、134、142)の語が用いられるのである。

キャサリンが妊娠し、フレデリックの心の中で彼女との家庭を築くことが大きな位置を占めてゆき、街の光景をも家庭という視点からとらえるようになる。前線へ向かう夜、暗く寒い霧雨の中で自分たちに似た兵士とその恋人の姿を見て、彼は「あの二人、行く場所があればいいんだがね。……誰にでも行く場所があるべきだよ」(147)と言う。また何台か通り過ぎる市電を見ると「どれも家へ帰る人たちで満員」(150)であることを意識する。列車に乗り込む前に数時間を過ごすけばけばしいホテルも「すばらしいわが

家」(155)と映る。キャサリンと共有できる空間こそが彼にとっての「家」であり、フレデリックは前線へ戻ってももはや「わが家へ帰ったという感じはしない」(163)のである。リナルディや神父、また操縦兵たちとの仲間意識はしばし戻りはするが、退却の際に彼の班は分裂をきたし、イタリア軍から裏切り者として処刑されそうになる。間一髪で川に飛び込んで助かるが、それまで一種の「家族」であった軍隊との結びつきが決定的に失われて「やたらと寂しい」(243)思いに襲われる。キャサリンとの再会を果たしてやっと「家に帰り着いた」(249)気分になれるのである。その後二人で住むスイスの山荘には読書やランプを楽しめる「僕たちの居間」(290)があり、ローザンヌのホテルへ移るとキャサリンは早速その部屋を「わが家のようにしたい」(309)と言い、出産後は一家でアメリカへ落ち着くのだという話を二人で交わす。

IV 役割モデルの不在

フレデリックとキャサリンの関係において、フレデリックは積極的に愛するよりはむしろ尽くしてもらおう立場にあるという印象を与える。軍隊を去った彼は、夜を徹してボートを漕いでスイスとの国境を越えるという活躍のあとは時間と活力を持て余している様子で、特に出産を数週間先に控えた時には活発にふるまうのはキャサリンで、フレデリックはただ眺めている場面がある。そのうえ「あなたって本当にお馬鹿さんね。でも私が面倒をみてあげるわ」(251)というキャサリンのセリフまであって、行動面でも言葉の面でも、臍甲斐なささえ感じさせる。フェミニズム論者からの批判を浴びる所以であろうが、そもそもフレデリックの周囲には夫、父親としてモデルとすべき人物が存在していなかったのではないだろうか。

一般に家庭において息子は将来の家庭内での役割を習得するものである。しかしフレデリックの場合には父親はいず、継父はいても連絡を取り合うような関係でさえない。唯一愛情を示してくれるのは祖父であるが、一世代隔てた存在である。また物語の後半で90歳を優に越えたグレッフィ伯爵から「(恋は)宗教的な感情であることを忘れないように」(263)と、キャサリンへの気持ちを肯定し彼女との生活を後押しされるような言葉を聞かされるが、彼もまた祖父の年齢に近い人物である。

父親の世代の人物フレデリックにとって模範となる存在は見当らない。軍隊には尊敬できる有能なナポレオンのような武将がいないことが彼の残念そうな感想として繰り返されている。時たま車で視察に来る国王は「あまりに小柄なので顔が見えず、ただ帽子のてっぺんと細い背中しか見えない」(4)と貫禄に乏しい。同じ隊の上官にあたる少佐は、フレデリックが数ヶ月の病院生活の後に会うと「より年老いてひからびているようで」(164)、「もうこの戦争にはうんざりだ。ここを離れたらきっと二度とは戻ってこな

いだろうよ」(165)と弱音を吐いてみせ、食卓につくと「とても小さく見えた」(172)とある。

本来ならば神父は精神面で慰めを与え救済する者であろうが、フレデリックの軍隊に配属されている神父はうぶな若者である。兵士たちは彼を前にして冒瀆的な話題も平気で展開させ、女性経験のないことをからかう。神父は自らの苦悩をありありと表情に見せ、威厳に欠ける弱さを覗かせ、「神父さん」(“Father”)という呼びかけ自体、皮肉でさえある。

夫婦のあり方で手本となる人たちもあまりいない。マイヤーズという何らかの犯罪により国外追放となっている老人とその妻が登場する。競馬に二人して興味をもっているのだが、夫は入手した情報をいっさい妻に伝えない。妻は入院している兵士たちをかわいがっているが、通りでフレデリックに出会った時「息子たちに差し入れする物があるのよ。あなたたちはみんな私の息子なの。本当に私の大切な息子たちなのよ」、「あのかわいい息子たち。あなたもそうよ。私の息子のひとりなのよ」、「あのかわいい息子たちにどうぞよろしく言ってちょうだいね。いっばい持って行ってあげるものがあるの。上等のマルサラとお菓子と」(103)、と矢継ぎ早に言う様子には片寄った病的な彼女の愛情が現われていて、夫との生活で精神的に満たされていない部分を別の対象への献身的行為によって埋め合わせようとしているようだ。いつも行動を共にしている夫婦ではあっても、二人の間に深い理解と愛情があるかどうかは疑問である。

物語も終わり近くになってやっと幸せな夫婦が登場する。フレデリックたちが部屋を借りるスイスの山荘の所有者であるグッチンゲン (Guttingen) 夫妻で、「二人一緒にいてとても幸福そうだ」(290-291)との印象をフレデリックは持つ。また、彼らと子供との関係にも愛情が基盤にあることが示されている。夫は以前ホテルでヘッドウェイターをしていて、息子もまた同じ職業に就くため修業をしている。父親への反発は無く、同じ生き方を受け継ぐ息子の姿がここにはある。老夫婦は息子がクリスマスに帰宅することを楽しみにしているという安定し満ち足りた暮らしを送っているのである。フレデリックたちに対しても親しみを込めた対応をし、見送りの際には「春になって気候がよくなったら、またいらしてください。赤ちゃんとばあやさんは今は閉めてある大きな部屋に入っていて、あなたと奥様には湖を見渡せる同じお部屋をお使いいただけますので」(307)と言う。子供の出産を控えたフレデリックとキャサリンがグッチンゲン夫妻のような生活を将来像として心に描くのは当然であつたろう。しかし、最終章はキャサリンの長引く陣痛の苦しみと無残な死で締めくくられる。

この作品の結末が悲劇であるのは、自分を無にしてまで男性を愛そうとしたキャサリンが赤ん坊と死ぬことであると共に、ようやく確保したはずの心の支えがフレデリック

から根こそぎもぎ取られてしまうことである。彼は全編を通じて自分にとっての「家庭」を求め続けたと言える。アメリカの自分の家族との関係がこじれ、イタリアに新たな生き方を期待し、軍隊へ入り一時的に拠り所を得るが脱走により復帰は不可能になる。その遍歴の中での女性との出会いを真剣な恋愛へと高め、やっとなつかんだ居場所が一瞬にしてなくなってしまったのである。フレデリックは、死を目前にしたキャサリンにむしろ気遣われ慰められている部分が多く、一家を支える要となる貫禄はまだ備えていない。子供の誕生後、住居を定め家族を確立させてゆく過程において彼自身の人間としての成長があり得たのだろうが、当面の間その可能性は断たれてしまい、新しい家族は結局描かれないのである。

註

- 1) Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Scribner Paperback Fiction, Simon & Schuster Inc., 1995), p. 8. 以下この作品からの引用はこの版によるもので、ページ数を () 内に示す。
- 2) Michael S. Reynolds, *Hemingway's First War* (Princeton: Princeton University Press, 1976), p. 41.
- 3) Gerry Brenner は、Frederic の入隊は建築家を志望した理由と同じで、軍隊のもつ秩序、明確な組織構造に引かれたため、と解釈している。Gerry Brenner, "A Hospitalized World," *Critical Essays on Ernest Hemingway's A Farewell to Arms*, ed. George Monteiro (New York: G. K. Hall & Co., 1994), p. 131. 初出は Gerry Brenner, *Concealments in Hemingway's Works* (1983).
- 4) Carlos Baker, "The Mountain and the Plain," *Critical Essays on Ernest Hemingway's A Farewell to Arms*, p. 99. 初出は *Virginia Quarterly Review* 27 (Summer 1951).
- 5) *Hemingway's First War*, p. 203.